

---

# 紅羽天使～開かれた扉～

來霞

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

紅羽天使〜開かれた扉〜

### 【Nコード】

N7401D

### 【作者名】

來霞

### 【あらすじ】

天使達が住まう国イルバールに古くから伝わる昔話。 紅い羽根の天使は死を運ぶ。その昔話と同じ紅い翼を持って生まれたリアーナ。養子として引き取られたセシル。周りを取り巻く運命に振り回される2人の運命は？！

## 第零章 始まり

昔、神の寵愛を一身に受けている天使が降りました。

彼女は誰よりも優しい心の持ち主で、神だけでなく仲間からも愛されておりました。

ある日、神は一人の女神を連れて彼女の元を訪れ、言いました。

私たちは近々結婚をする、と。

それを聞いた彼女は泣きました。

彼女も、ずっと神を深く深く愛していたのです。

その深い愛は悲しみのあまり憎しみに変わり、彼女の中を支配してしまいました。

彼女は深い悲しみと憎しみのあまり、神と女神を殺してしまったのです。

その時、彼女の穢れの無い純白の羽が、まるで2人の血を啜ったかのように、鮮血の色に染まってしまいました。

その日を境に、彼女は変わってしまいました。

彼女が現れると必ず誰かが死を向かえることから、人々は恐れ、畏怖し、彼女を『紅の死天使』と呼ぶようになりました。

彼女が行方を眩ませてから、天使たちの間で時折紅の羽を持った子が生まれるようになりました。

紅の羽の子が生まれる度に、人々にしが訪れました。

以来『紅の翼を持つ者は、死を運ぶ天使の生まれ変わりだ』と言われていきます。

紅の翼は、髪を欺いた罪の証。

神の流した血を啜り、純白の翼が染まった印。

紅の翼は死を運ぶ。

羽を紅く染めるため、血を啜るために

これは、天使たちが住まう国イルバールに古くから伝わる昔話。

嘘のようで本当な昔話。

一人の少女の運命を巻き込む物語が今、開かれようとしていた……。

## 第一章 籠の中の鳥 - 1 -

コンコンッ

「リアーナ」

天使の住まう国、イルバール国宮廷内の地下深くに隠された一つの扉を、青年…セシル…フェルシアが軽くノックする。

暫くすると、ギ…ギ…ギイ…と重たい音と共に扉が開き、一人の少女がヒョイツと顔を覗かせた。

「セシル、いらっしやい」

少女 リアーナは、花が綻ぶ様な笑顔で、セシルを中に招き入れた。

「リアーナ、今日はコレ持ってきたんだ」

はいつと渡されたのは、リアーナの好きな真っ赤な薔薇。リアーナは嬉しそうに受け取ると早速花瓶に活け始めた。

「セシル、いつも来てくれてありがとう」

薔薇を花瓶に活けながら、リアーナは礼を言った。

その嬉しそうな横顔に、セシルはフツと顔を緩ませた。

「いや、リアーナが礼を言う必要は無い。そもそも、リアーナがこんな地下に閉じ込められている自体がおかしいんだしな。お前は、この国の第一皇女…国王の一人娘なのに」

それを聞いて、リアーナは苦笑を漏らした。

彼女はイルバル国第一皇女、王位継承権第一猪子としてこの国に生まれてきた。

そんな彼女が地下に幽閉されているのは、普通に考えればおかしい事この上ないのだ。

「仕方ないの、セシル。私が“紅い翼の子”だから…。それに、王位はセシルが継ぐんだもの。問題なんて無いでしょう?」

リアーナは笑顔で、けれど何処か淋しそうに言った。

セシルは、彼女の翼に視線を移した。

彼女の翼は、燃える様な綺麗な紅色だ。

この国では“紅い翼は死を運ぶ”と言い伝えられてきた。

無論、国の人々は信じては居なかった。

今まで、そのようなものを一度として見たことがなかったからだ。

そう、リアーナが生まれるまでは…こんな噂は誰一人として信じてはしなかった。

彼女が生まれるとき、王の初めての子として国の人々全員が見守っていた。

生まれたその瞬間、国中に歓喜が起きた。

しかし、生まれてきた赤子の翼を見た瞬間、一気に静まり返った。

その赤子の翼は、血を啜ったかのような鮮血と同じ紅色だった。

古い言い伝えと全く同じ赤子に、皆恐怖を感じた。

生んだ后さえも、恐怖で叫んだ。

唯一王だけが“私の子”と嬉しそうに赤子を抱き上げていた。

その赤子に恐怖を感じた人々と后は、王にその赤子を始末する様訴えた。

しかし、王は聞き入れなかった。

「わが子を殺せと申すかつ！！」と冷たい視線を人々と后に浴びせた。

けれど、人々の恐怖は薄れるどころか逆に高まってしまい、国が乱れかけてしまった。

王は泣く泣く、その子を地下に幽閉した。

『リアーナ』という名と共に。

「仕方ないの。だから、ここに閉じ込めた父様を責めたり、憎んだりなんてしないわ。あの時、父様が護ってくださらなかったら、私今ここにいないもの」

「だけど、やっぱりおかしい。リアーナの翼は…こんなに綺麗なのかな」

リアーナの真紅の翼にそつと手を触れながらセシルは納得がいかないと小さく呟いた。

私の翼を綺麗と言ってくれるのは父様とセシルぐらいね、とリアーナは笑みを零した。

「でも、私が幽閉されたから、セシルと出会えたのよ?」

「そうだけだな」

セシルは王の実子ではない。

いわば拾われた子だ。

唯一の王位継承者を泣く泣くとはいえ幽閉してしまい、跡継ぎに困

った王が、王位継承者に、と拾ってきたのがセシルだった。

「拾って下さったことには深く感謝してる。だけど、俺は“王”と言う器じゃない」

王にはリアーナになるべきだ。

セシルはずっとそう思っていた。

「私は、セシルが王になるの嬉しいわよ？」

「どこの誰だか分からない俺になるのに？」

セシルには拾われる以前の記憶が無い。

どこで生まれ、どのように育ち、どうして捨てられたのか…全て記憶の闇の中に消えていた。

「セシルは“悪い人”じゃないもの。私には分かるわ」

「今の“俺”は、な。昔の“俺”はどうだったか分からない」

「“昔”なんて関係ないわ。大切なのは今、このときを過ごしているあなた自身でしょう？」

セシルの手を両手で包み、優しく微笑むリアーナに、セシルはフ…と表情を緩めた。

「……………ありがとう」

「ふふっ、お礼を言うのは私のほうよ。ありがとう、傍にいてくれて」



心底嬉しそうに微笑むリアーナの頭を撫でようとした時

フェル様ー?!

こっちはいらっしやらないぞ!!

此方にもいらっしやいません!!

何処へ行かれたのだ、皇太子は?!

上のほうが少々煩くなってきた。どうやらセシルを探しているらしい。

「セシル、戻ったほうが良さそうよ」

「……そうする。これ以上煩くされたら嫌だし」

渋々といった様子でリアーナの部屋を出るセシルに、リアーナはクスツと笑った。

「リアーナ、また来るから」

「ええ、待ってるわ」

リアーナの頭を一撫でして、セシルは地下から出て行った。

リアーナは彼の姿が見えなくなるまで見送り、部屋の中に入っていた。

ふと、テーブルに視線を移すと一冊の本が目に入った。

古びたその本は、リアーナが幽閉されて5歳になったある日、母親

である王妃が投げて寄越してきた物だった。

当時、まだ書き読みを習い始めたばかりのリアーナには読めなかったその本。

何気なく本を手に取り、ベッドサイドに座った。

「『紅い翼の物語』…か」

お前の本性を知れ、と母様に怒鳴られながら渡された本よね、とりアーナは何気なくその本を開いた。

## 第一章 籠の中の鳥 - 2 -

### 昔々の物語

神に愛される一人の天使

皆にも愛された慈愛の天使

神を一途に愛した一人の天使

神をあまりに愛し過ぎた天使

神の結婚に深い悲しみを覚え

深い悲しみをその身に宿す

ああ、どうして私ではないのですか

私は貴方をこんなに愛しているのに…

神への深い愛が、悲しみと共に歪み、殺意に変わる

私を愛してくれないのなら

他の人のものになってしまうのなら

殺シテシマエバイイ

天使は憎しみの思うままに神を殺し、神の後も殺した

だけど憎しみは晴れず

ついには仲間も襲うようになってしまった

彼女は神の血で紅く染まった翼を広げ

仲間を次々襲い、その命を奪った

仲間達は彼女を恐れ、言いあつた

『紅い翼がやってくると死が訪れるぞ』…と

それは後の子孫にも伝えられ、昔話に形を変えた。

それがこの本なのである

「……………紅い翼が畏怖されてるのは、こういう訳だったの」

本を詠み終わり、パタン…と本を閉じてベッドに寝転んだ。  
紅い翼にこんな話があるなんて、思いも寄らなかった。

「紅い翼は…神の血で染まった…罪の証…ってことね。そして、血を求めてる…って言われてるし」

ああ、でもそれは本当の事なのかもしれない。  
リアーナは小さく溜息を吐いた。

思い返すは十年前。

あのとき、まだ6歳の誕生日も迎えていなかった。

リアーナの傍には、乳母であるロゼリアが常に傍にいた。

王とセシル以外からは疎まれ畏怖されているリアーナを、赤子の頃から愛しみながら育ててきた彼女を、リアーナも大好きだった。

ロゼリアはリアーナに色んなことを教えた。

リアーナは一生懸命、彼女の教えを覚えていった。

そんな幸せな日々は、突然終幕を迎えた。

王妃が、リアーナを暗殺しようとする目論み、それに気付いたロゼリアがリアーナを庇って殺されたのだ。リアーナの目の前で。

目の前で胸を剣で貫かれ崩れるようにして倒れていくロゼリア。

リアーナの心は、恐怖・憎しみ・悲しみに支配され、頭は真っ白になった。

何事だ、と王とセシルが駆け寄ってきたときには、リアーナは気を失っているのか倒れており、その目の前には暗殺者のしたいが。

そして、リアーナは全身血だらけだった。

羽根も、暗殺者の血を浴びたのか、いつもより鮮やかな紅色を放っていた。

王とセシルはこのことをもみ消しにした。

だが、リアーナはしっかりと覚えていたのだった。

そして、王妃はリアーナに向かい『お前は呪われた子なのだ。ロゼリアが死んだのもお前の所為』と暴言を吐き、リアーナに合わなくなった。

「そのあと、父様に洗って頂いたけれど、色が落ちなかったのよね」  
まるで、生地が染色液を吸って色づいたかのように、羽根も血を吸って色づいたかのような、と一人コ呟いた。

「ロゼリア……」

今はもう居ない、優しくて大好きだった乳母の顔を思い出して、涙ぐんでいると、コンコンツと扉を叩く音が響いた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7401d/>

---

紅羽天使～開かれた扉～

2010年10月9日04時36分発行